

東京バッハ合唱団 月報

[第 745 号] 2024 年 7 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.745

July 2024

—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

キラキラ星変奏曲の初演をお祝いして

椿 高明 (A R S、オーボエ)

今回は管弦楽全曲版の世界初演にオケとして携わらせていただきました。

演奏 70 分の大作ながら、イエスの生涯をたどるストーリーとめくるめく多彩な変奏に、両教会でのお客様は、“あつという間だった”というご感想、そして大喝采は初演大成功の証です。心より御祝い申し上げます。

団員の松尾さんがこうした作品を温められていることは、初めてお目にかかったころから、それとなく伺っておりましたが、こうして実際にコンサートの堂々たる主演目として大喝采を浴びる日が本当に到来し、いま、大村恵美子先生と合唱団の皆さんとの松尾さんへの温かい気持ち、その愛の大きさに、満れる思いです。

以前、宝物のようにスコアを抱えた松尾さんが「今はオルガン伴奏ですけれど、この曲はフルオケにもなるんですよ」と嬉しそうに仰っていた日を思い出します。それだけに、今回管弦楽初演のお話をいただいたとき、「二度とない初演ですから、お使いになりたい楽器は全部揃えますので仰ってください」と申し上げ、先日は木管 4 声 + 金管 3 声 + 弦楽合奏という編成で臨みました。

42 曲の曲想と音符を身体に入れるには、普段よりも長い練習時間を要しました。なにより、膨大な音符を相手にしながらも、音楽的な音色・表現を維持し続けることは、フルマラソンをずっと笑顔で走りきるような難しさがありましたが、こうした準備作業を「松尾さんの笑顔を観よう」という合言葉で乗り切ってくれた器楽面々に深く感謝します。



リハーサル中の松尾茂春氏 (6月15日・三崎町教会)
写真提供: (有)パラビジョン

お客様の大喝采を浴び、松尾さんの最高の笑顔を観ることができ、私たちも特別に嬉しく、格別に記憶に残るコンサートになりました。

このたびは、ご盛会たいへんおめでとうございました。そしてキラキラ星変奏曲の初演大成功、心より御祝い申し上げます。

音符の記号が 命溢れる響きに！

椿 高明 様、A R S の皆様へ

松尾 茂春 (「キラキラ星変奏曲」作曲者、団員)

この度の特別演奏会にあたり、椿様のご尽力と A R S の皆様の暖かいご協力、卓越した演奏に心より感謝申し上げます。机上の音符の記号であったものが、豊かな命溢れる響きとなつたことは驚きです。

私は、小中学生の頃から、オーケストラによる器楽曲に傾倒し、大きくなったら、オーケストラ曲を書き、指揮するような空想をしたことありました。一方、二十歳ころからは音色より音楽の構造的な面に興味が移り、あまり楽器を問わない小規模の合唱曲を機会があつた時に作/編曲するにとどまつてきました。

今回の「キラキラ星変奏曲」も、その流れに始まつたものの、次第に変奏が増え、パイプオルガンでの演奏を依頼した際に、ストップの多彩な適用での音色の多様性に惹かれたことから、一つの憧れとしてオーケストラ版もイメージするようになったのです。

そんな折り、大村恵美子先生の一聲からその全曲演奏の企画が始動し、さらに椿様、A R S の皆様からオーケストラでの共演の機会を賜つたのは当初の希望を超えて光栄なことでした。作曲、指揮の両面で、小中学生時代の空想が現実になったのです。

骨組み最優先で作っていた者がオーケストレーションを行うのは、絵で言えばデッサンのペンを油絵の絵筆に持ち替えるようなもので、なんとも不器用なスコアとパート譜をお渡しすることになつてしまい申し訳ありませんでした。それにも関わらず、皆様、時間をか

月報 2024 年 7 月号 CONTENTS

- ・感想など (富塚 研二、山本弘史) / 終了報告 … p. 2
- ・現代によみがえった PASSION (風岡和子) …… p. 3
- ・連載：退屈するのはいそがしい [41] (大野博人) p. 4



■管弦楽版初演を指揮する松尾氏。空き席ゼロの荻窪教会で（写真提供=A・N）

け、汗を流して練習を続けていただき、独唱・合唱との合わせにあって最初から搖るぎないアンサンブルを聴かせ、演奏会にあってはステージを暖かく共有してくださいました。

安定と変化と味わいのある響きをもって共に曲を豊かに造りあげて下さったこと、誠に感慨深いものがあります。本当にありがとうございました。

<ご感想をお寄せ頂きました>

富塚 研二（富塚研二研究所）

昨日の特別演奏会では皆様お疲れ様でした。感想を少し。

・『キラキラ星変奏曲』、このような取り組みは喜ばしく思います。しかしながら器楽パートに声楽、合唱パートが埋もれてしまう場所もあり、オケを薄くする、など工夫は必要かと感じました。内容は素晴らしいので初演で終わらずに、抜粋版や改訂を施すなどして繰り返し演奏されるとよいですね。（編集次第でクリスマス礼拝などに使えるのでは、と思います）

・カンタータでは、皆様の長年日本語でバッハを歌われてきた積み重ねをしみじみ味わいました。

また向後ともよろしくお願ひいたします、益々のご清栄お祈り申し上げます。

キラキラ星変奏曲、イエス・キリストの足跡を体験

山本 弘史（後援会員・元団員）

6月8日荻窪教会、15日三崎町教会と、団員の松尾茂春氏の大作、「キラキラ星変奏曲～主題と1+40の変奏で歌い綴るイエス・キリストの足跡～」が初演された。70分もかかる大作であり、完成された松尾氏と演奏をなしとげた東京バッハ合唱団、コレギウム・アルモニア・スペリオーレ・ジャパン、及びソリスト方には、その労と高い演奏レベルに賞賛の思いを禁じえません。

この曲は、キラキラ星のもともとの歌詞が、イエス・キリストの降誕を祝う歌詞であることからスタートし、変奏を重ねながら、その歌詞はイエス・キリスト

の生涯、受難、復活までを表現したヘンデルの「メサイア」と同じ大規模な構想に基づいているオラトリオです。作曲の技法は、バッハの対位法を研究し、フーガの技法のような構想になっています。

出だしの小シンフォニアから、通奏低音が主題を演奏しますが、必ずしも目立たず、ヘンデルのメサイアと似た雰囲気になります。第2曲からソプラノが主題をはっきり歌いますが、他の声部は見事な対位法表現であり、技法的にとても良くできています。その後、フーガの技法のように、主題の逆行、逆行、拡大、縮小等のあらゆる技法が使われているところで、変奏も40になるのが納得できます。

このように、対位法の難しい技法を用いて書かれている本作ですが、最も素晴らしいのは、この作品が単に技法的作品には聞こえないところです。あくまでも、聖書を語るオラトリオとして、その内容の伝達、表現に重点がおかれており、それが十分に果たされています。技法が勝る曲ではないと思います。あくまでも、イエス・キリストが中心にいます。作曲家の意図にそって、私たちはイエス・キリストの現場にあり、終曲を迎えます。盛り上がりを見せたフーガのあのコラールです。名作と同じエンディングと言えます。

私たちは、宗教曲としてバッハ、ヘンデルをもっぱら歌うようです。それは、それらが必ず抜けて感動を与えるから。他の作曲家のものは、知らないか、歌ってみると、やはり感動が少ない感じてしまうのです。和音や技法が単純だという理由もあるかもしれません。

<公演終了報告>

東京バッハ合唱団 特別演奏会 2024
「バッハと仲間の音楽会」（2回公演）

- ① 2024年6月8日、午後2時、荻窪教会
② 2024年6月15日、午後2時、三崎町教会

曲目

- ・キラキラ星変奏曲 Version 2.0 (詞/曲・松尾茂春)
- ・ヴァイオリン、フルート、オーボエのための協奏曲 BWV 1064
- ・カンタータ第6番《とどまれ我らと 夕闇せまり》BWV 6

演奏

[独唱] S 藤原優花、A 中島麻紀子、T 野中裕太、B 及川泰生
[管弦楽] A R S (コレギウム・アルモニア・スペリオーレ・ジャパン)
[オルガン] 田尻明葉、[合唱] 東京バッハ合唱団
[指揮] 大村恵美子 (BWV6)、松尾茂春(キラキラ星変奏曲)

いずれも入場無料

協力：荻窪教会、三崎町教会（各、日本キリスト教団）

出演者数：50名（指揮・オルガン各1、ソリスト4、ARS 16、合唱団27、録音1）

来場者数：2会場合計：199名（①50名、②149名）

■ユーチューブ公開中、ぜひご覧ください。

Youtube (②会場) ⇒ <https://youtu.be/DNTaEcnHwTo>

（録画編集：（有）パラビジョン）

本作品は、技法のレベルが高く、信仰告白は純粋に伝わり、旋律も親しみやすく、歌詞に良くあうようになります。すると、バッハやヘンデルではない曲として、次に歌いたくなる曲の1つと感じました。より、多くの人に体験していただきたいと思います。

最後に、全曲演奏の決断をされた、大村恵美子先生に感謝いたします。(2024/6/23)

【筆者・山本氏は、山形県で内科医院を開業する医師、オルガニスト。地元でバッハを中心としたコンサートを開催しています】

■その他にも、各会場でのアンケートに多数のご回答をいただいています。たいへんな文字数ですので、多少の編集作業の後、来月号の月報紙上にて、そのいくつかをご紹介します。

現代によみがえった PASSION

会話点描～「キラキラ星変奏曲」をめぐって～

風岡 和子（団員、アルト）

☆松尾ファミリーの物語

きっかけは娘が幼かった頃ヴァイオリンの発表会のために作曲したいいくつかの変奏です。よく知られたメロディだったので、娘も妻のピアノ伴奏でのびのび楽しそうに演奏してくれました。

（娘さんのさやかさんがステキなレディとなって、奥さまの文子さんと荻窪教会の公演にご来場。指揮者 [=父] にエールを送られた：風）。

サラリーマンにとって作曲に集中できる時間は限られています。往復の電車の中で思いついたメロディやアイディアを駅のベンチに座って忘れないように書き留めることもあります。父は画家です。チラシや楽譜装幀のデザインとカットはすべて父の作品です（本人）。

☆大村先生のふたこと、みこと

この楽譜、立派に出来上がったわね。ぜひ演奏会をやりましょう。団員の友情がきっと実りますよ。

バッハ合唱団の演奏会だからバッハも入れなくちゃね。カンタータ BWV 6 を加えましょう。そうそう、間に1曲、器楽曲を入れるというのはどうかしら。気分が変わるし。Tさん考えてみて。

そうですね、バッハのトリプルコンチェルトはいかがでしょう。ヴァイオリン、フルート、オーボエ、それにチェンバロが活躍しますよ（ARS の Tさん）。

（素晴らしいヴィルトゥオーゾ達の演奏を目の前で堪能できたのはこの上ない喜びだった：風）

☆会場提供の2つの教会

荻窪教会でぜひやってください。荻窪教会は聖トマス教会を目指していますからね。荻窪は日本のライ

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

プツィヒ。S井さん、三崎町教会はどうですか（K海先生）。

なんとか開催できるように頑張りますよ。入場は無料、会場の募金も無し、終了時間は16時30分厳守です（S井さん）。

（かくして両会場での演奏会は無事に終了。居眠りしている観客が一人もいないという前代未聞のうれしい結果。来場者数も合わせて200名近くに上った。：風）

☆ソリスト探しのミッション

これ最大の難関ですね。合唱団のフトコロ事情がからんでいるんですから。大学院生に依頼？なるほど。ヤバイ、演奏会もうすぐじゃないですか。

近々所属している「21合唱団」の演奏会に大学院生のソリストが出演しますよ。

なんというめぐり合わせ。当たって砕けろ！

指揮者のS木先生に頼んでみます。OK出ました！「おう！主は行く／イエスはロバの子に乗り／向かうはエルサレム／そこはダビデのみやこ」

（若々しくも深く美しい声が礼拝堂に響き渡った時、凛として清冽な空気に満ちあふれ、「キラキラ星変奏曲」はいっきに佳境へ：風）

☆バッハのカンタータは教会でこそ

夫「礼拝では牧師が説教する内容を頭で理解するわけだけど、今回初めて教会でバッハのカンタータを聴いて、聖書の言葉が心と体にスーっと入ってきた。音楽の力ってすごいね」

妻「いつもは演奏会で寝ているクセに、あなたの目のウロコがとれてよかったです。バッハは毎日曜日ごとの礼拝のためにカンタータを作曲したのよ。当時の人々もきっと同じことを考えたわね」

それ、シュバイツァーが言ってますよ。カンタータは聖書の絵解きの役割を果たしているってこと。ノートルダムやシャルトル大聖堂のステンドグラスはもっと前の時代、文字が読めない人々のために描かれた聖書の物語だから歴史を感じるよね。さしつめ「キラキラ星変奏曲」も現代の……。



■カンタータ第6番を終えて会場に挨拶する主宰者・大村恵美子。

ステージ上は、最前列左から S藤原優花、A中島麻紀子、T野中裕太、B及川泰生のソリスト陣。管弦楽はARS、オルガン田尻明葉の各氏と東京バッハ合唱団。

三崎町教会、6月15日（写真提供=（有）パラビジョン）

＜連載随想＞
退屈るのはいそがしい [41]

歯が痛い

安曇野閑人 大野 博人

奥歯が痛くなり、歯科クリニックに行った。医師は口の中をちょっとのぞいてただけで、「ああ、なるほどね」と原因を突き止めた。虫歯ではないという。

「あなた、よく歯ぎしりするでしょう。長年、昼も夜も奥歯を強くかみ続けていたはず。だから、奥歯の付け根が弱ってきてるんですよ」

疲れがたまって体力が落ちると、その弱点に菌が入ってきて悪さをする。それが痛みの原因らしい。

「そうか、私はこれまでずっと歯をくいしばって生きてきたということなんだ」

なんだか褒めてもらったような気がした。

「口元をゆるめ、いつも少しほかーんと開けるようにしてください」と医師。

新聞社を退社してからは、そうとうぼーっとして暮らしてきたはずだが、もっともつとぼーとしなければならないということだろう。ゲータラ生活へのお墨付きをいただけたようでうれしかった。

この歯痛には25年ほど前に遠因がある。ユゴ内戦でベオグラードに入っていたときに虫歯になったあたりなのだ。取材で6週間ほど滞在していたが、空爆下の街で歯医者に通うわけにもいかない。毎日じわじわと痛みが増すのをがまんしながら放置するしかなかつた。

現場から出てパリに戻ると、すぐに歯科に飛び込んだ。ひどくなった虫歯を抜き、ブリッジを架けて義歯



をつけてもらった。たくましい腕をした女医さんが、いろんな機器を口の中に突っ込んでガリガリ、グイグイ。口の中で道路工事をされているようだった。

虫歯に隣り合っていた2本の歯がブリッジを支えることになった。そのひとつが今回の患部。抜かれた歯の分まで歯ぎしりに耐え続けることになった。その負担がたまっていたらしい。

歯に限らない。40年近くの記者生活なんて、戦争取材に行かなくても健康にいいはずがない。睡眠不足、運動不足、ストレスの蓄積……。ワーカホリックではない私にしても、あまり身体にいい年月ではなかった。

小さな不調が出るようになったのは、中年になったころからだ。

ある朝、起きると肩が痛くて腕を上げられない。初めての経験だった。会社の診療所で見てもらうと医師が「五十肩だよ」という。40代前半だった私は「まだ50になつません」と抗議した。「じゃあ四十肩だね」という。で、四十肩でも五十肩でも同じ湿布薬を処方された。

ジャカルタ駐在のころは、いきなり高熱にうなされることもあった。日本で免疫が獲得できていなかった熱帯特有の病原体のせいかもしれない。かなり強い腹痛が起きたときは、がまんできず地元の医院にかけこんだ。私のインドネシア語はかなりあやしかったが、九州大学で学んだドクターは、日本語が流ちょうではほつとした。しかし……。

「先生、お腹がかなり痛いんです」

「あなた、昨日の夜、和食店で刺身を食べませんでしたか？」

「いえ、和食店には行ってません」

「じゃあ一昨日は？」

「やっぱり行ってません。刺身も食べていません」

「でも、とにかく、あなたはどこかで生ものを食べたにちがいない。で、赤痢にかかっているのです」

あまりに簡単な問診だけでいきなり告げられた病名に仰天する私を尻目に、特効薬だという薬品を処方してくれた。でも、検便もしないでこんな薬を飲んでいいじょうぶか。不安になった私は、日本大使館の医務官に電話してみた。彼は薬品の名前を聞いてたしかにアメバ赤痢の治療薬だという。

「大野さん、お腹痛いんでしょう。赤痢に効くくらいだから、たいていの腹痛はなおります。飲んだらいいですよ」

おおざっぱなインドネシア人とおおざっぱな日本人の医師のおかげかどうか。たしかにその後、腹痛は消えた。だが、あれはほんとうに赤痢だったのだろうか。

長い間、こんなに不健全だった日々のツケをそのままにしてよいわけがない。だから、安曇野に移住してからも、畠作りで体を動かすし、ジムにも通っている。

しっかり退屈するには、不断の努力が必要なのだ。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)